P-319　胸腺癌に対する外科治療症例の検討

自治医科大学外科学講座呼吸器外科部門

長谷川　剛，佐藤　幸夫，大谷　真一，手塚　康裕，手塚　憲志，
遠藤　哲哉，蘇原　泰則

【目的】胸腺癌は胸腺上皮細胞由来の悪性腫瘍で比較的稀な腫瘍であり，その手術術式や治療方針についての検討はいまだ不十分である．今回自治医科大学附属病院単独施設における胸腺癌手術症例を検討した．【対象と方法】診療録から患者情報を抽出し，可能な限り組織標本及びレントゲンフィルムを参照した．1975年から2002年末までの胸腺癌症例13例を対象とした．【結果】27年間に当院において外科治療が行われた胸腺癌症例は13例であった．術前病期分類はIII期6例，IVa期1例，IVb期6例と周囲臓器への浸潤の頻度が高く進行例が多かった．リンパ節転移を6例に認めた．それぞれ放射線治療，化学療法など集学的治療を行った．5年生存率45%，10年生存率は30%であった．【考察】胸腺癌はリンパ節転移や術後遠隔転移も発生しその予後は良いものではなかった．さらに治療成績の最近の文献報告との比較と今後の治療の検討を行い発表する予定である．